年末のガソリン高止まり 激戦区150円台後半、円安重荷

#マーケットニュース #東京 #大阪

2022/12/27 17:11 [有料会員限定]

前年と同水準の価格を掲げる店が多い（東京都世田谷区）

年末年始の需要期を迎えたガソリンの店頭価格が高止まりしている。東京や大阪の給油所では、大幅な値上がりを示した2021年と同水準か、少し上回る価格が多い。原油高と円安がガソリンの製造コストを押し上げている。政府の補助金によって一段の上昇は抑えられているが、製造コストの増加傾向は変わらず、家計の重荷となっている。

東京都内の給油所激戦区である東京都大田区から世田谷区にかけての環八通り周辺は、1リットル150円台後半～160円台前半の看板を掲げる店が目立つ。21年同期と同水準だ。大阪市や堺市、大阪府南部の岸和田市や泉佐野市では160円台が中心で、21年より3〜6円高い。

東京都在住の20代男性は、年末年始にスキー場でインストラクターを務める予定という。「大雪の立ち往生被害も続いているので、なるべく満タンにしておきたいが、依然として高く悩みの種だ」と話す。

大阪府岸和田市のガソリンスタンド男性従業員は「一時はすさまじいペースで値段が上がり、周辺では170円台のスタンドもあった。価格変動は少し落ち着いてきたが、まだ高いままだ」と話す。

ガソリンの高止まりは全国的な傾向だ。資源エネルギー庁によると、12月19日時点の店頭価格（全国平均）は168.1円と、前年同期より2%高い。新型コロナウイルス禍前の19年同期を14%上回る。

ガソリンの価格は原油市況に影響を受ける。アジアで原油価格の指標となる中東産ドバイ原油は21年、コロナ禍からの需要回復で急上昇、22年のウクライナ危機で拍車がかかった。3月上旬には1バレル128.8ドル前後と、約14年ぶりの高値を付けた。現在は80ドル前後と、世界景気の悪化懸念から軟調に推移するが、前年同期と比べれば1割弱高い。

原油価格の高止まり以上に、ガソリン価格を押し上げているのは円安だ。21年末は1ドル=115円前後だったのに対し、足元は1ドル=130円台前半。ドル建ての原油価格が下がっても、円安が石油元売りの調達コストを押し上げた。

JTBによると、年末年始（12月23日～23年1月3日）の国内旅行者は約2100万人と、前年同期比17%増える見通し。コロナ前の19年同期の7割まで回復する。利用する交通機関は乗用車が6割を占める。

世田谷区で給油していた40代男性は「ガソリン価格が高いからといって遠出をやめることはない。必要な物なので値段のことは極力考えないようにしているが、なるべくセルフの給油所を使うようにして、節約できるところで節約している」と話す。

22年は食品や日用品など幅広い商品が値上がりし、消費者の暮らしを直撃した。国内の消費者物価の上昇率は11月、40年11カ月ぶりの高水準だった。帰省や観光で多くの人が動く年末年始のガソリン価格高止まりは、家計に重い負担になる。消費者の節約志向が一層高まる可能性もありそうだ。

補助金、価格決定ゆがめると批判も

政府は2022年1月、ガソリンの急激な値上がりを抑える補助金を導入した。全国平均の店頭価格が1リットル168円程度になるよう、35円を上限に石油元売りなどに支給している。給油所への卸値を抑える原資に充ててもらう狙いだ。

資源エネルギー庁によると、12月22～28日の補助金支給額は15.6円。補助金がない場合の店頭価格を26日時点で183.6円と想定し、168円との差額を支給した。

補助金がない場合の想定価格は、6月に最大の215.8円まで達した。補助金の効果で店頭価格は170円前後に抑えられた。家計に恩恵が及ぶ半面「ガソリン価格の高騰による需要減が値下がりを促す、本来の価格決定メカニズムをゆがめる」との批判も根強い。

12月までの補助金予算総額は、燃料油全体で3兆円を超える。政府は23年1月から5月まで補助金の上限を毎月2円ずつ段階的に下げると発表した。6月以降も補助を絞る考えだが、急激な値上がりを招かないソフトランディング（軟着陸）が求められている。

物価高・値上げを考える